

日々の元気を発信

高齢者を地域で見守る仕組み

いわておげんきみまもりシステム

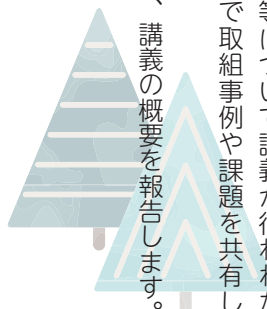


緊急ではなく 元気を発信するシステム

いわておげんきみまもりシステムは、地域に暮らす高齢者が、自立しながら安心して生活が送れるよう開発された見守りシステムです。高齢者が、自ら自宅の電話から毎日「元気」を発信するという分かりやすい仕組みが特徴で、現在、県内の27市町村社協（利用休止中を含む。）が導入しています。

11月29日、本システムの取組内容を共有するとともに、課題を把握し、今後の推進方策を研究するため、市町村社協職員を対象に、「令和3年度いわておげんきみまもりシステム研究会」が開催されました。研究会では、本システムの開発者である小川晃子岩手県立大学特命教授から、ICT（情報通信機器）を活用した見守りシステムの開発経緯やシステムの特徴等について講義が行われた後、全体で取組事例や課題を共有しました。

以下に、講義の概要を報告します。



第1次システムは、平成15年に岩手

県立大学と旧川井村社協が共同開発したもので、開発の背景には、各市町村社協に緊急通報システムが入っているも、緊急ボタンを押すことの負担感からボタンを押せない高齢者を助けられないという課題がありました。

また、当時、民生委員に調査を実施したところ、見守りに線引きや定義がないため業務に不安を抱える方が多く、また、熱心な民生委員ほど一生懸命に見守り、受け手の高齢者に見張られているような精神的負担を与えている状況がありました。

お守りのようなシステムではなく、見張りにならない見守りとはどういうものか、関係者と議論し、緊急通報とは逆の発想で、元気を発信することで裏側の異変を把握していく仕組みを構築しました。

その後、平成21年から県社協と一緒に

に社会実験を始め、平成22年に事業化した第2次システムが、いわておげんきみまもりシステムで、「1.げんき」「2.すこしげんき」「3.ぐあいがわるい」「4.はなしたい」から、その日の健康状態を選んで発信する仕組みです。ダイヤル式の電話の場合は番号選択ができないため、かけるだけの発信となりますが、使い分けできることが大きな利点です。



小川晃子特命教授（右）

いわておげんきみまもりシステムの仕組み

① 一人暮らし等の高齢者（おげんきさん）が、1日1回自宅の電話機から指定番号に電話し、自動音声に従って、その日の健康状態を発信します。（おげんき発信）

発信する項目

電話機の該当する番号を押す

1. げんき
2. すこしげんき
3. ぐあいがわるい
4. はなしたい

② おげんき発信は、おげんきみまもりセンター（市町村社協）に届き、職員がその日の状態を確認します。

「ぐあいがわるい」場合など、必要に応じて見守り協力者（みまもりさん。あらかじめ登録した家族、隣人、民生委員など）に連絡します。「はなしたい」を発信すると、職員と話すことができます。

③ おげんき発信がない場合は、センターから連絡し、状態を確認します。

※発信情報は、希望により、別居親族等にメールで配信することができます。

システムの利用効果は？

「いわて“おげんき”みまもりシステム」に関する調査から

岩手県社会福祉協議会では、令和2年度、県内の市町村社協を対象に、「いわて“おげんき”みまもりシステム」に関する調査を実施しました。システム利用者や社協の状況に関する調査項目の中から、システム利用の効果に関わる項目をピックアップし、調査結果を紹介します。

以下、システム導入済みの18社協からの回答数

システム利用の効果

複数回答/それぞれ上位3項目を掲載

利用者にとって	
見守られることへの安心感	15
社協とのコミュニケーションツール	10
生活の張り合い	7
能動性・自立性の向上	7
親族にとって	
確実な安否確認の安心感	12
安否確認の負担軽減	7
社協とのつながりができる	4
社協にとって	
異変に気付くことができる	14
確実な安否確認	12
孤立死対策	9

システム利用により判明した経緯

認知症の発症や進行の疑念	10
脳卒中等の発作や骨折などで倒れている状態	9
突然死、自殺などの発見	5



オンラインで開催された研究会

「おげんき」発信の利用効果

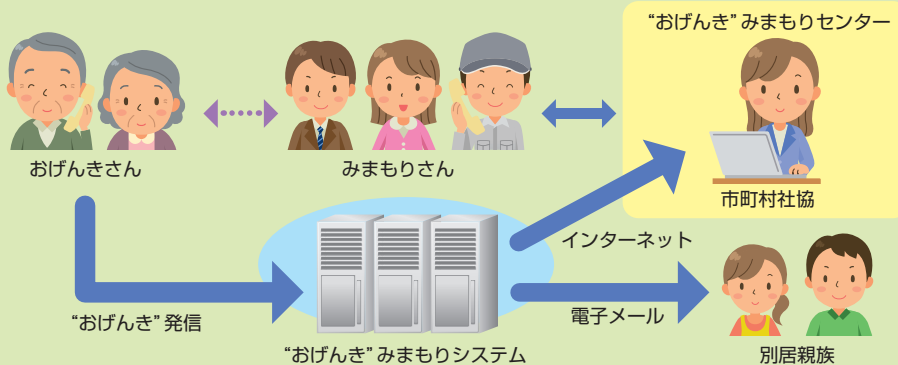
本システムは、毎日能動的に押すこと、緊急ではなく平常を発信することが特徴で、使い続けることで高齢者の能動性が高まり、自立支援につながります。そして、見守られることへの遠慮感がなくなるとともに、近隣とのネットワークが形成され、社協が高齢者にとって身近な存在となっていく予定です。

システムの課題

見守りは制度ではないため、どこまでどのようにやればよいのかという動きづらさが、システム普及の一つの壁になっています。しかし、社協が担うみまもりセンターの業務は、地域住民のために主体的に取り組む事業として、生き残り戦略の一つになるのではないのでしょうか。

異変がある場合は安否確認をする運用で、地域で必ず見守る形で確実性が高く、24時間に1回の確認により、突然死は防げなくとも孤立死を防ぐことができる仕組みとなっています。また、元々入所や入院の連絡のために作った「4. はなしたい」という選択肢は、今後、本当に困ったことがあつて相談先がないときの相談先になっていくのではないかと思います。

土日の見守り体制や見守り業務の時間的負担感も普及の壁となっていますが、みまもりセンターでの業務対応が困難であれば、地域包括支援の中で、他機関と組んで行う方法もあるのだろうと思います。また、システム利用者の自己発信率は95パーセントで、未発信の場合のほとんどは発信忘れです。異変を追いかけるときの時間的な負担感、社協として地域を守るために必要なものではないかと思っています。広報不足、情報不足も大きな課題で、開発当初は周知に力を入れていたものの、今ではシステムを知らない民生委員も多く、対象となる高齢者に情報が届かない状況となっています。利用者は替わっていくので、繰り返し広報し、新たな今必要な人に情報を届けることが必要です。



■利用可能な電話機は？

固定電話（押しボタン式・ダイヤル式）、携帯電話、スマートフォン（いずれも利用可能です）。

■費用は？

「おげんき」発信の際、規定の電話料金（1回10円程度）がかかりますが、システム登録料や基本利用料はかかりません。